

salamander  
in the circle

第三十五章 時限爆彈

峯村 明

# Salamander in the circle

第三十五章の登場人物		
イリチャ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王
アマセオ	……	鳥を守護神とするシトリ族の出身
ヘルガ王女	……	エウメロス王国の王女
レル・ヴァリス	……	エウメロスの近衛隊長

これまでの主な登場人物					
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ヤスウ	学術調査団の団員		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ダーヴェ	学術調査団の団長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヒューダー	学術調査団の団員		フツスシ	王に仕える者 将軍
エウメロス王国	摂政	亡国王の弟		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	ヴァリス将軍	レルの父		チドリ	アマセオの妻
	カール	王子 ヘルガの弟		ハマツ	チドリの養父
	ロウナス	国務省の高官		タマシギ	ハマツの養子
	アンテロ	レルの副官	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
ケストル王国	パウル	国王	マミヤ	ホシナ族の娘	
	ウルリク	第三王子	スクナ	世界の果ての島の王に仕える者	
	ヘンリク	ウルリクの息子	コタエ	“	
	ホベオク	ケストル人の美女	トヨケ	タカミムスビ族の長老	
	ソルド	闘技場の警備隊長			
黄金門市	皇帝	皇帝	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	パソネル	バイスロイの参謀		メルノ	音楽家
アンベレオ	ソラン	祭祀長		バルダリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
	ドゥル	ベレオ-サ家の当主 シバドの兄		メンドルブ	メッサナ化学者団の代表
	シバド	ベレオ-サ市の新総督		バラム&バランケ	双子のジャカー バンテオラの部下
冥界			冥界王	冥界の王	
			ベネトナシュ	死神	
			テクトリ	最下層ミクトランの主	
			プラトニオ	メッサナを追放された化学者	

## 目次

### 時限爆弾

514.

515.

516.

517.

518.

519.

520.

521.

522.

523.

524.

525.

第三十五章のあとがき

これまでのあらすじ

奥付

## 時限爆弾

514.

その晩、レガリオとバイスロイとは長い時間、食事を共にしながら、あれやこれやと話しあった。アンベレオの食事は、たいへん美味である。食材も料理人も植民地から大量に入ってくるから。そのため、肉なのか野菜なのか、はたまた別のものか、なにを調理した料理なのか、バイスロイには見当もつかないものが多かった。美味ではあるが少々不気味ではある、というのが彼の内心だった。

そんなバイスロイの心の内を知ってか知らずか、レガリオはこっそりと考えている。  
(大祭が明けると……)

(大祭が明けると、それまで人々が口にすることも珍しいも美味な料理が、盛大にふるまわれるのだという……)

人々は流れ星とともにやって来た神々に祈り、賛歌を歌い、踊り、美酒に酔い、『再来した神々』からくだされる素晴らしい料理を堪能するのだ――

515.

夜半に、レガリオの侍従がこっそりと主の私室の扉を叩いた。  
「このような時刻に申し訳ございません。なにぶん、大至急のお話、とのことでござい

まして」

侍従には『大至急の話』であるなら昼夜問わず知らせるようにと言いつけてある。さて、どのような緊急案件かと、レガリオは届けられた文書を開く。それを見たたん、思わず、え、と目を見開き、ソファのバイスロイを振り返った。

レガリオのその動きは嫌な予感そのものだった。間違いなくバイスロイ自身に関わる案件なのだ。彼はごくりと唾を呑み込み、そろそろと体を起こした。レガリオもまたごくりと唾を呑み込み、そろそろと友に向き直る。

「行こう」、とレガリオはかすれた声で囁いた。「早く、支度を」受け取った文書を手近のろうそくにかざす手が、震えている。文書はみるみる燃え上がり燃え尽きて、灰がろうそくの受け皿に落ちた。

「何処へ行くのだ」バイスロイもかすれた声で囁く。レガリオはその腕をがっしとつかんだ。

「いいから。早く！ あのお方がお待ちだ！」

## 516.

「……やつれたな。美少年が台無しだ……」

新鮮な果物のように丸みのあった頬はげっそりと肉が落ち、バイスロイはしばし己が目を疑った。イリチャはそんなバイスロイをじっと見つめ、やがてきつく目を閉じ、助けを求めるように両手を差し出した。バイスロイはそれを受け止めた。

「ヒューダーと、ダーヴェ先生が……」

そうつぶやくのを聞いて、イリチャの憔悴が彼らに関係があると悟ったバイスロイである。

「彼らのことを知っているのか！？ 誰かがきみに教えたのか！？」

イリチャはバイスロイの肩に額をこすりつけるように頭を振った。

「誰も。ぼくにはわかるんだ。本当のことが。ただわかってしまう。メッサナの新しい支配者がケストル人のソルドを巨人に襲わせたことも、ジャガーにマミヤを襲わせようとしたことも、あなたが『そいつ』に目をつけられていることも」

「——ちょっと待て！ ジャガーに娘を襲わせようとした話は聞いているが、それがマミヤだったって！？ なぜあの娘を！？」

「黒曜石の短刀だよ」

バイスロイは頭を殴りつけられた思いだ。短刀を失くしたことに気がついてはいたのだが、こんなところで顔を出すとは。まさか、だった。

「『そいつ』、シパドっていったっけ。短刀はシパドの手に渡っていたんだ。貴方が持ってたあの短刀の関係者を探すうち、マミヤが浮かんでしまったというわけ。ほとんどどどんぴしゃだよ。すごいよね、執念で」イリチャは面を伏せたままちょっと笑ったが、バイスロイには笑い事ではなかった。

彼の存在自体がシパドを狂的なまでの執念に駆り立てているということではないか

---

「ヒューダーも、ダーヴェ先生も、マミヤも、それにもしかしたら……」イリチャはさらに何事かつけ加えようとして口をつぐんだ。

「評議会が爆弾に手を出す前から、ヒューダーたちはミクトランにいたんだから、なんの関係もない！ だれも罪を犯してなんていない！ マミヤだって！ バラムだって、なにをしたっていうんだ！」

「バラムがどうしたって？」

「バラムはバランケがとうに殺されていたことを知っちゃったんだ。それで逆上して、シパドに飛びかかって、シパドが持ってた短刀で……」

「黒曜石の、短刀で、か？」

「バラムの方から飛びかかった勢いもあって、バラムはほとんどまっぷたつになっちゃった」

しゃべっているうちにイリチャはずるずると脱力していき、ついに膝をついてしまった。

「シパドという人、おかしいよ、いかれてる。死神だってあんなにぶっ飛んじゃいなかった」

「そうだ、イリチャ、あの時なにが起こった？ きみはなぜアンベレオにいる？ きみになにがあったのだ？」

「バイスロイさん……」

「きみたちも私も、巨人族の謎を追ってミクトランに到達した。辿った道は異なっても同じ目的を追っていたんだ。同じ志を持つ者同士とっていい」

「そうかもしれないけど、貴方はヒューダーと仲が悪かったじゃないか」

「まあな。しかし、イリチャ、そんなことは問題じゃない。なあ答えてくれないか、私の質問に」

517.

「バイスロイさんも『あの男』をみた、そうでしょ？」

「ああ」

「『彼』は、怒ってた。死神をものすごく、怒ってたんだ。死神は『彼』のいいつけを適当に聞き流して好き放題やってたらしい。巨人族を操作してたのも死神だったんだよ。『彼』は、そんなことを許した憶えはないと言ってた。それで『彼』は、死神が弄んでた巨人族を一瞬でぜんぶ握りつぶし、ミクトランそのものを冥界から切り離そうとした。ぼくはびっくりして……だってミクトランにはヒューダーもダーヴェ先生も、バラムもバランケもいたんだから」

「私もいた」

「うん、だから、ぼくは頼んだ、みんなを助けてほしいって」

「『あの男』はきみの頼みを聞いたというわけか。巨人族を一瞬で握りつぶし、ミクトランを冥界から切り離す。そんなことができる『彼』とは、何者なのだ」

バイスロイの問いにイリチャはすぐに答えられない。なにか言いかけるが口ごもってしまう。それでもさんざん逡巡したあげく、

「死神は、『彼』を冥界王、と呼んでいた」

「——冥界王——」

「うん」



「冥界の王」

だれにも訊かせたくない。そんな思いがこもっている。バイスロイにはそう感じられた。

「イリチャ。ここアンベレオの王宮できみと再会した時、きみはひどく辛そうだった。きみは冥界王に捕らえられたということなのだろうか」

バイスロイは相手がゆっくりと首を横に振るのを見る。

「そうじゃない。ぼくに危害を加えたとか、脅したとか、そういうんじゃないんだ。逆なんだよ」

「——逆——??」

「『彼』は、ぼくを助ける、と言った。できるかぎりのことをする。心から、そうさせてほしい、と」

「————」

「この指輪を取り返してくれたのも『彼』だ」

そういつてからイリチャはひどく顔を歪めた。

「これはぼくの宝物だったんだ。だから、それ以外の理由なんて——そんなのウソだ！

ぼくは——信じない！」

「落ち着いて、イリチャ、こういうことでいいだろうか、きみとマミヤとヘルガ王女、三名が立ち会って同意のもとに黒曜石の短刀はヘルガ王女へ、王女からはきみへ指輪が贈られた」

イリチャの頭がこっくりとうなずく。

「だからその指輪は、マミヤとヘルガ王女、二名の存在と、黒曜石の短刀の重みとを持っている。つまり……幾重にも重なった意味をもつ、きみ自身の象徴だ」

イリチャはこくこくと幾度もうなずき、叫ぶように言った。

「そうだよ！ あのフライトは大冒険だった！ ヒューダーはいなかったし短刀を預かっていたし、ぼくはひとりでマミヤを助けに行かなきゃならなかった！ 短刀がゴンの願いを抱えているのがわかった。ゴンのためにもマミヤを助けなきゃならなかったんだ！ だから、マミヤもヘルガさまもみんな、無事だってわかったときはほんっとうに嬉しかった！ ぼくは、やった、やり遂げたんだって！ あんなに嬉しかったことはないよ！ 指輪にはあの時の思い出やみんなの気持ちがぎゅうっと凝縮されて詰まっている。

だから——それ以外の理由なんて、あり得ない！！」

518.

「『彼』が指輪をきみに返したのは、別の意味があるからだったんだな？ 『彼』は何と言ったんだ？」

「……『彼』は……ぼくを王子と呼んだ」

「……………」

「この指輪は、『彼』が心底愛したひとのなんだった。ぼくはそのひとから生まれて『彼』は父親だというんだ！！」、「どういうこと！？ これをくれたのはヘルガさまだ、じゃあぼくはヘルガさまから生まれたっての！？ そんなことありっこない！！ヘルガさまは小さい時からレル・ヴァリスが全身全霊でお守りしてて、成人するまでは男をひとりも寄せ付けなかったんだって！！ ねえ、ぼくが信じてるのはヘルガさまとレルなんだ、あの男じゃない！！」

「それは——聞き捨てならないぞ」

バイスロイのくぐもった声には不穏な響きがあった。

「レル・ヴァリスとは王室近衛隊のあの男だろう！？ そうだあいつが王女をガードしてたんだって！！ すると、なにか？ 私は王女の手を取るのにあの男の許可がいるのか！？」

イリチャは、あ、という顔をした。「そういえば。バイスロイさんはヘルガさまの婚約者——」

「さよう。忘れてもらっては困る。と、いいたいところだが、なあ、イリチャ、それはケストルにつかまっていた王女を取り戻すための方便だった。だから王女が無事くにへ戻った際に解消すべきだった。

だが私はケストルに留まって巨人族の謎を追い、王女はエウメロス人を率いてトゥランへ向かい、事態が混然としているときに、王女は評議会が原子爆弾なるものに手を出したという情報を掴んだ。そしてアトランティス大陸を西から東へ、北周りで横断するルート上にある氷河で評議会の輸送機が遭難した。遭難の衝撃が氷河を決壊させる、氷河の真南にあるケストル王国がその直撃を受ける恐れがあった。王女はそれを知って、すぐさまケストル人を救うために、ケストル王国へとって返したのだ。自身がさんざんな目に遭ったケストル王国へ。そして疑心暗鬼の目を向け、困惑する人々を導いた。ご

本人はとにかく夢中だったと言っていたが、そんなときこそ人の本質というものが現れる。たいしたおかただと思う。

しかし、王女の本当の目的は私だった。自身と入れ違いに、私がケストルの虜囚となったことに負い目を感じられたのだな。ゆえに……どこまでも……ミクトランまで私を追ってきた。

残念なことだがもはや私は王女の人生に関わることはあるまい。人には生まれながらにそれぞれの使命がある。今となっては王女がその使命を果たされることを祈るばかりだ。イリチャ、きみが王女との思い出、王女との関係を宝物と感じているその気持ちは、私にはよおく、わかるぞ」

「バイスロイさん……」

「いやついきみの話を横取りしてしまった。私の思い出などどうでもいい。きみの話を聞かなくてはな」

「——どこまで話したんだっけ？」

「『彼』はきみの父親で、その指輪が証拠だと」

イリチャは聞きたくもないというように両手で頭を押さえ、激しく頭を振った。それから、がっくりと肩を落とした。

「ぼくには本当のことがわかる。なぜか、わかってしまう。『彼』の言ってることは、本当だ。真実なんだ」

519.

イリチャの本当の母親が誰か。バイスロイは知っている。むろんエウメロスの王女ではない。まったくの別人である。しかしイリチャの苦しみはそういうことでなく、己の出自が明かされたことによって己の真の姿を知ってしまったことだ。

其は、人間の生贄を要求する者。

アンベレオ王国は国民に疑いを抱かせないよう、アンベレオ人を供儀にはしない。もっぱら戦地での捕虜、外国人、犯罪者が充てられるのだ。ネウトラ評議会の有罪判決によって罪人となったダーヴェとヒューダーが“供儀対象者”となるであろうことは、容易に想像できた。

今、イリチャは生贄の血を要求する神の代理人となってしまったのだ。

そしてイリチャをさらに絶望させたのは、彼が本来の力を発揮できない状態にあることだ。

その理由は、冥界王が息子を己の代理人として世界に知らしめるために記念硬貨を鑄造する計画をたてたことに端を発する。それは非常に長い年月にわたって息子の存在を知らずにいた冥界王の、息子への謝罪の意味があったのだが、しかし冥界王は知らなかった。環に囲まれることは息子の本来の能力に多大な影響を与えてしまうことを。

「バイスロイさん！　ぼくはどうすればいい！？　ぼくになにができる！？　このままではぼくは、この手でダーヴェ先生やヒューダーを——殺すことになる——！！」

紺藍色のマントの男の強い視線を受けて、アマセオはすっかり弱っていた。

ふだんは目立たないように脇に立っているけれども、なにかコトが起こると、今のよう  
に、遠慮なく、主の前に出てくる。目の覚めるような金色にうねる長髪と氷河のよう  
な冷たい青い色の目。その目は怒っているように見える。甘いマスクの持ち主だけに、  
怒りを湛えた眼差しはアマセオが思わずたじろぐほど、美しかった。抜き身の刃物を付  
きつけられたような衝撃。

いつだったかコタエが言っていた。「あの方には気をつけて。ご主人のヘルガさまの  
前ではおとなしくしてらっしゃるけど、得体のしれない力をお持ちなのよ」

かつてケストルを退却する際、コタエが太刀打ちできなかったヘルガへの攻撃を退け  
たのは、おそらく彼だ。それを『愛の力』と呼ぶことはできるかもしれない。けれど、  
とコタエは躊躇する。あの時レル・ヴァリスから感じたのは甚だしい怒りだった。なに  
ものをも受容する愛の力と激しい怒りとは、相反するものではないのかしら……？

コタエの躊躇はともかく、レル・ヴァリスがなにがしかの力を秘めているのは本当だ  
とアマセオにも感じられた。現にアマセオは抗いがたい力に捕らえられたように、ここ  
へ来ざるを得なかったのだ。

「話はすべて聞かせてもらいました」

レル・ヴァリスは低い声で短くそう言った。ふだん目立たないようにさがっているせ  
いか、この人、こういう人だったのかと妙な感慨をおぼえるアマセオである。が、兄  
者、びびっている時ではないぞとカガセオに耳打ちされて深呼吸する。彼は何を知っ  
ているというのだろう。ヘルガ王女を送り届けてからスクナ、コタエと共に辞し、ここし  
ばらく彼らには会っていない。いや、もう会うことはなかりとうと念入りに、今生の別れ  
の挨拶をして別れたのだ。

「僕は本来遠感など持っていなかったんですがね。コタエさんとつきあううちに具わってしまったんです。結果、コタエさんの考えておられることは僕には筒抜けです」

アマセオはあっけにとられ、「はあ」という間の抜けた返事しかできない。

「メッサナで何が起ころうとしているのか。イリチヤの両親。彼の素性。すべて、コタエさんの思考から直接聞かせてもらいました。まあ、こちらが気を逸らせていれば聴くことはなかったんですが。あまりにも」

レル・ヴァリスはそこでちょっと表情を緩めた。「あまりにも、興味深かったので、無礼と知りつつ」

「そう、でしたか……」

コタエさまー！！ 気をつけてもなにも、あなた本人がこの人と一つ一つだったとは！ うかつにもほどがあるでしょー！！ と胸中でこっそり罵るアマセオである。

「そこで、アマセオ、きみはどこへ行こうとしているのだ」

いきなりそう斬り込まれて、アマセオは反射的に身を引いてしまった。

**521.**

レル・ヴァリスはずいっと前へ出てきた。「メッサナへ。そうでしょう」

「……………」

「そうなんです。厳重に閉鎖されているメッサナへどうやって入るのか知りません



が、やはり、行くつもりなのだ」

つかまってしまった。アマセオはそう直感した。この人は世界の果ての島のコタエたちの話を聞きながら、こっちの動向までうかがっていた。そして飛び立とうとしているところを狙いすまして、地の底まで”引っ張って”きたのだ。……ということは……

「ならば、僕も行きましょう」

「は……しかし、ですね、嚴重に閉鎖されているメッサナへ入るには、その、いろいろと、ひじょうに危険でもありますし」

「アマセオさま」

声をあげたのはレル・ヴァリスの主。

「これはわたくしの意志です」

「……王女殿下……」

「ひとりでも多く、助けたい。それがあなたの意志なのでしょう？」

「……は。殿下」

王女殿下はにっこりとほほ笑んだ。

「それはまさしくわたくしの思うところ。それゆえ、わたくしは最も信頼するこの者を、あなたの助力者として提供いたします」

522.

王女が退出してからアマセオはたまらずにレル・ヴァリスの腕を掴んだ。

「本気ですか！ 近衛隊長の貴方が！？」

「僕は自分から志願したのです。さもなければ、殿下はご自分が赴かれるつもりだった」

「え——」

「そういうお方なんです。バイスロイ氏を助けに行くと言いだされた時には誰にも止めることはできませんでしたが、今回はさすがに、僕が止めなければ。事情を傍聴したのは僕ですし。アマセオ、ひとりで背負いこまないで。僕は、いや、エウメロス人は、王女殿下を冥界から連れ戻してくれたきみに恩義を感じている。きみをひとりで行かせはしない」

「……………」

レル・ヴァリスは言い淀んだアマセオが再び口を開くのを辛抱強く待った。

「トゥランへ向かうあなた方は、生き延びる使命を負っているのです。このまま進めばあなた方はみな生き延びることができる。そう約束されているのです。だから、あなた方を巻きこみたくなかった。だというのに——」

「アマセオ、教えてくれ。なにか計画をもっているんだろう？ 黄金門の皇帝陛下とトヨケ様がやすやすときみを行かせるとは思えない」

\*

ヘルガがレル・ヴァリスをあっさり手放した、そんなわけがない。ひとりでも多くのメッサナ人の命を救わなければ、王女のその気持ちは溢れんばかりだったが、今度ばかりは王女たる彼女がメッサナへ赴く大儀が見当たらなかった。

「貴女はもう、ここを離れてはいけない。僕が行きます。どうかお許しを」

「——レル・ヴァリス。ならば条件があります」

「……どのような？」

「エウメロス王女の、夫となることです。ならばわたくしの名代を名乗ることを許可します。皆も納得するはず」

王女がミクトランから単身“帰国”した際、黄金門の皇帝は王女の任務が達成されなかったことを理由に、息子との婚約を破談にしていた。その時皇帝は言った。「息子は息子の道を生きる。そなたはそなたの道を生きなさい」

\*

彼女はか弱くも気高い鳥なのだと、レルは思う。ケストルの闘技場で籠に押し込められた青い羽の小鳥の姿は、夢にみるほど彼の脳裏に強くきざまれている。ふと、ある考えが浮かんだ。ケストル王の魔力が彼女をそんな姿に変えたのではない、のかもしれない。

ヘルガは自分で自分に魔法をかけたのではないだろうか。

ケストル王の手が及ばないよう。籠のなかへ。

しかし思いが定まれば思いきり羽ばたいてどこまでも飛んでいってしまう。彼女はか弱くも気高い鳥なのだ。

カガセオの美しい緑の翼が力強く風を切る。この鳥の化身がヘルガ王女に惹かれるのも無理はない。レルはそんなことを考えていた。

523.

時はまさに、『神々の再来』、大熊座流星群の季節に差し掛かる。

この一大ページェントのためにアンベレオの植民地からは多くの観光客がやってくる。内外の一般市民のために国庫が開け放たれ、物資も食べ物も、国をあげての大盤振る舞いの日々が続く。人々ひとりひとりが天からも国からも自分は大事に、特別に扱われていると感じ、泣き笑い、歌い踊り、ほとんど肉体的快樂の極致のなかで我を忘れ、熱狂し、再来した神々を称えるのだ。

「レル・ヴァリス、真顔でいないでください。周囲から浮いてしまいます」

「おたくこそ」

生真面目ということにかけてはどっちもどっちである。が、この祭りの真の顔を知ってしまった彼らにはむりやりにでも笑うことなどできない相談だった。それでもそのできないことを彼らはむりやりにやらなければならない。顔を引きつらせるようにして笑顔を作り、歓声をあげなければならないのだ。

こんな苦難が待っていようとは想像もしていなかったレル・ヴァリスはかなり後悔したがもはやあとの祭りである。

新ベレオーサ市へ入るにあたり、商人の出入りがあるはずだと踏んだアマセオとカガセオはあれこれ探りをいれてみたものの、商人の承認はかなり厳しいものであった。

そこで、行幸する国王の一行に紛れ込んでしまうことにした。希望者は着飾って行列に加わることができるのである。この栄えある行列にはアンベレオ人だけが参加を許さ

れるのだが、明らかに異国人のアマセオとレル・ヴァリスが紛れ込むことができたのは、カガセオの催眠術のおかげだった。周囲の者たちには彼らがアンベレオ人に見えるように暗示をかけたわけである。実態をもたないカガセオのこういう能力はひじょうに強力だった。

だがしかし。暗示にかからない者がいた。新ベレオーサ市へ入る直前の宿泊地で彼らは偶然、顔を突き合わせてしまったのである。

## 524.

バイスロイにしてみれば、晴れ着を着こんで浮かれている者たちの中に、あまりに場違いに地味な者がいたので嫌でも目に入った。レル・ヴァリスの方も向こうから一段と派手派手しい服装の男がやってきたので思わず引いてしまった。

艶やかな紫色の衣装の左胸に輝く銀色の勲章は国王の私的な招待者を示すもの。そして幅の広い金色のサッシュと金色のターバン。サッシュとターバンにはバラ色と紫色と緑色の宝石がこれでもかというくらい縫い留められていて、身動きするたびにじゃらじゃらと音をたてんばかりに揺れ、灯りに煌めく。こんなに目立っていいのかと心配になるようないで立ち。

彼は指輪をいくつも嵌めた指で美酒の入ったクリスタルのグラスを二つ持ち、満面に笑みを浮かべてゆっくりとレルに近づいてきた。銀の勲章の威力にみなぎ道を開ける。随行している楽団がエキゾチックな甘い音楽を奏で、バイスロイは調べに合わせて軽く踊ってさえた。こうなると、歌って踊って芝居もできる芸術家バイスロイは水を得た魚である。

「ごきげんよう」と、彼は歌うようにいい、芝居じみた動作でグラスのひとつをさしだす。「お近づきのしるしに」

レルは仕方なくグラスを受け取ったが、間近に相手の目を見るうち、相手が浮かれてもいなければ酔っぱらってもいけないことがわかった。相手はいたって、醒めていた。そんな目で通り過ぎる美女の流し目を受け止め、ウィンクを送ったりなんかしている。そして微笑した口で低く言った。

「フリだけにしろ。飲まんほうがいい。麻薬入りだ」

「どうして僕だとわかった？」

「どうしてもなにも。ほかのやつらはなぜ気づかんのだ」

「暗示をかけてあるからだが」

「私には暗示はきかぬというわけか」

バイスロイはおかしそうに笑った。ではシパドの術に嵌ったのはなんだったのだ。レルにはわからなかったが、バイスロイの自嘲の笑いだった。

「ところで、こんなところまで、何をしに？」

「……」

525.

「本気か！？」

「もちろん。しかし、すべてというわけにはいかない。なにしろ儀式まで時間がない。

おそらく、“彼ら”を何とかするだけで手いっぱいだろう」

「……勝算は？」

レルはかすかに首を振る。

「……勝算もなしによくもこんなところまで忍び込んだものだな」

「……我が主君の、心のままに」

彼らはグラスを捧げ持ったまま、目を合わせようとしなかった。しかし、それぞれの視線の先には同じひとりの人物像が存在した。

「勝率はいたって低いんだが、計画が進行中だ」

「——どういう？」

「“時限爆弾”だ。“彼ら”はその時が来る寸前に発動するよう、それを仕組んだ」

第三十五章 『時限爆弾』

第三十六章へ続く



### 第三十五章のあとがき

改題する前と後、ずいぶん違う話になってしまった（なが〜くなった。どこで長くなったんだろ??）ようですが、基本的には変わってはいません。たぶんこのまま、かたす  
とろふいへとまっしぐらです！！

（しばらくの間応援ツール設置してありましたが、表示されなくなってしまいまして、  
プログラムが古くてサーバーの方でフォローされなくなったという認識でいいんだろう  
か？ なにしる筆者力不足のため、復旧諦めました。また、ブログもやはり表示されな  
くなったためリンク外しました。訪問くださった皆様にはお礼とお詫びを）

2024年3月26日 記

## これまでのあらすじ

### 第一部

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。

ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見え、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を離れた団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。

エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。

エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。

成り行きからヒューダーは少年にイリチャという名を与え、闘技場で戦うことになる。

### 第二部

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。

同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を離れてメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

### 第三部

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。

妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちほだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。

ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

### 第四部

母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。

巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。

ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。

世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

### 第五部

太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェェだった。

ダーヴェェは仲間のヒューダー、イリチャと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチャに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチャ=槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチャはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

## 第六部

テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチャの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチャは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチャだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

## 奥付

Salamander in the circle

第三十五章 時限爆弾

2024年4月1日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「月とサカナ」イラストAC](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---